

## 宗教と戦争（その2）

大森 海太

一神教は紀元前十四世紀、古代エジプトのアメンヘテプ四世が従来の多神教を廃し、唯一神アテン（太陽神）崇拜を強要したことが始まりと言われる。

その後この地で働くヘブライ人が過酷な労働に堪えかね、モーセに率いられて脱出しシナイ山で十戒を授かり、約束の地カnaanに入つて先住ペリシテ人を駆逐し、ダビデ王のもとで統一を果たした。

このあと王国は南北に分裂しバビロンの捕囚で辛酸を舐めたが、その後旧約聖書のもとになる神話（エデンの園・・・）がまとめられ、やがて選民思想のユダヤ教が形成されていった。

そしてこのユダヤ教から派生してキリスト教とイスラム教が誕生し、三大一神教として今日に至るまで様々な確執を重ねてきた。

古代ローマ帝国ではユダヤ教とキリスト教は共に迫害され、二世紀にユダヤ教徒はパレスチナから追放されて各地に離散した（ディアスポラ）。いっぽうキリスト教徒は地下に潜行しつつも信徒を増やして帝国内に浸透し、四世紀末には国教としての地位を得るに至った。

七世紀アラビア半島におこったイスラム教徒はまたたく間に勢力を拡大して東のササン朝ペルシャを滅ぼし、西では東ローマ領のシリア、エジプトからアフリカ北岸を西進してイベリア半島に達し、西ゴート王国を倒して後ウマイヤ朝を樹立した。

その後キリスト教徒は十字軍により聖地エルサレムを奪回したが、二百年足らずで撤退。しかしこの間、西欧がイスラム圏から進んだ文化、学問、知識を得たことは大きかった。

一方イベリア半島ではレコンキスタが進行し、十五世紀末にはイスラム最後のナスル朝が退いたが、カステイリヤを中心とする「野蛮な」キリスト教徒による蹂躪は苛烈で、かのビン・ラディンは「アンダルスの悲劇がパレスティナで繰り返されることを許さない」と述べたとか。十六世紀のスペインでも厳しい迫害により商工業を担うユダヤ人たちが逃避し、新大陸からの大量の銀にもかかわらず財政は破綻した。続きはまた次回。